

# 鳳来寺のヤクシ像

——日本で山頂にまつられた万能救済者の偶像——

小 林 信 彦

A

山頂に住む礼拝対象

三河の国の東部に標高695メートルの鳳来寺山がある。その山頂に鳳来寺という真言宗の寺院があり、そこに置かれているヤクシ（薬師）の彫像は“ミネノ-ヤクシ”（峰の薬師）と呼ばれ、奇跡を起こして窮地から救う偶像として、昔から人々の信仰を集めている。日本には山上の寺院にまつられるヤクシ像が多いが、代表的なのがこの鳳来寺のヤクシ像である。

さて、18世紀の初頭に超海通性という人がいた。和泉の国、八田荘の安楽寺で住職をしていたが、ヤクシにかかわる奇跡物語を集めて、『瑞應塵露集』という本を1730年に完成した<sup>1)</sup>。

余曾テ薬師如來瑞應傳ヲ撰ジテ既ニ梓ニ壽フス。亦小願ヲ發シテ更ニ聞キ傳ヘシ瑠璃尊ノ感應前ノ傳ニ漏レタルト及ビ光明眞言寶篋印呪等ノ靈驗茲ニ一所ニ纂メ。編ヲ三ニ分チ。卷ハ六ニ離シテ顔シテ瑞應塵露集ト號ス<sup>2)</sup>。

この本の中で超海は鳳来寺のヤクシを特に取り上げ、鳳来寺山の形態に言及して、山頂のヤクシ像が“ミネノ-ヤクシ”と言われるようになった理由を述べている。

総ジテ此山ニ三ノ峰アリ。古老ノ口授ス 即チ是佛金蓮ノ三部ヲ表

スト。此峰ニ存ス如來ナリケレバ。世ニ峰ノ藥師ト號シ奉リケル<sup>3)</sup>。

この鳳来寺山の三つの頂は、「佛金蓮ノ三部」を代表するという。“佛金蓮ノ三部”というのは、“佛部”と“金剛部”と“蓮華部”の三つをまとめた表現であり、真言宗で礼拝の対象となっているものを三つのグループに分けたものである。三河の鳳来寺山では三つの峰そのものが礼拝対象である。

“此峰ニ存ス如來ナリケレバ”と言われるように、このヤクシの本来の居所が山頂であるので、世間では“ミネノ-ヤクシ”と呼ばれている。そして、“佛金蓮ノ三部ヲ表ス”という言い伝えがあり、この山頂はありがたい所として知られている。同じような例はほかにもあり、古くからヤクシ像が山頂に置かれている。

比叡山頂に住むようになった22歳の最澄は、自らヤクシ像を彫って自分の住む小屋に置いた<sup>4)</sup>。ところが、最澄が拠り所とした『法華經』には「藥師佛」が登場しないし、最澄が尊敬した智顗もこの「佛」を重んじていたわけではないのである。そして今も、比叡山の根本中堂で本尊として礼拝されているのはヤクシ像である。

高野山の講堂に「本尊」として置かれているのは“アシュク”(阿閼)と言われているが<sup>5)</sup>、この彫像に礼拝する際にヤクシノ-シンゴン(藥師の眞言)を唱えと言われる<sup>6)</sup>。そして、高野山でアシュク像が置かれている建物は“ヤクシ-ダウ”(藥師堂)と呼ばれる<sup>7)</sup>。もともとここにはヤクシ像があったらしい。

醍醐寺は山の上の草庵に起源があり、これは“カミ-ダイゴ”(上醍醐)と呼ばれるようになったが、その中核を成す建築物はヤクシ-ダウ(藥師堂)であり、創立の頃にさかのぼるヤクシの彫像が置かれている。法隆寺の「西園堂」に置かれているヤクシの彫像は、五来重によると、もともと裏の梵天山にあったもので、そこではヤクシ-ケクッ(藥師悔過)<sup>8)</sup>が行われていたという。

このように、日本には昔からヤクシが山頂に馴染むものとされてきたが、仏教のパーイシャジャグル(bhaiṣajyaguru/藥師)も中国の「藥師」も山

とは何の関係もない。ヤクシと山との関係は古くからの日本文化に根差すものであるらしい。

山頂にカミがいるという発想は遙か昔から日本にあった。国作りを続けようとするオホナムチ（大穴牟遲）に協力を申し出たカミは、引き受けるに当たって、「東の山の上に祭ってくれ」と条件を出している<sup>9)</sup>。最澄がヤクシ像を置いた比叡山の山頂は、以前からオホヤマクヒ（大山咋）の本拠地であった<sup>10)</sup>。日本の文化伝統に則って山頂に崇拜対象を置いたとすれば、“此峰ニ存ス如來”と言われる鳳来寺山のヤクシ像と同じように、最澄が比叡山頂の修行小屋で礼拝していたヤクシの彫像は、よそから来たヤクシ<sup>11)</sup>のヨリシロ（依り代）であったのと同時に、昔から山頂に住み着いていたオホヤマクヒのヨリシロでもあったらしい<sup>12)</sup>。

## B

### 医療を扱う礼拝対象の同一視

このヤクシ像について語るべきことはそれだけではない。山頂のカミの具現体であるヤクシ像は、医療専門家の役割を与えられ、中国の「神農」および日本のオホナムチ（大己貴）と同一視されている。

大成經及旧事記ノ説ニ依ルニ。此峰ノ桐樹の中心洞トナリタル内ニ藥師神農大己貴尊ノ三尊像ヲ安置セリト。サレバ古徳ノ口傳ニモ。藥師神農大己貴尊ハ即チ同體ニシテ唯本迹ノ異名ナリト習ヒ傳ヘルコトアリ<sup>13)</sup>。

『大成經』などという經典は聞いたことがなく、仏教の文献に日本の寺院に來歴など記されているはずもない。同音の「大乘經」からの連想の基に、でまかせに挙げた書名であろうか。

中国で「神農」は伝説上の皇帝であるが、後に技術に係わる神となり、その重要な担当分野に医療技術がある。オホナムチはアシハラノナカツクニ（葦原中津国）で国家運営の基礎を固めたカミであり、世のため人のために尽くしたが、その活動の一環として、「病を療むるの方」を制定し<sup>14)</sup>、古く

からヤクシと同一視されていた<sup>15)</sup>。

超海通性の『瑞應塵露集』では、ヤクシと中国の「神農」と日本のオホナムチが同一視されていることに言及して、“同體ニシテ唯本迹ノ異名ナリ”と言う。「本迹」というのは中国の発想を日本人が借用して、独自の発展を見たものである。

さて、『法華經』には「永遠のブッダ」(久遠佛<sup>くおんぶつ</sup>)というアイデアがあり、「ブッダは限定された時間を生きたのではなく、無限の昔に究極の真理に到達した〔。そして、今も真理を説き続けている〕」と言う<sup>16)</sup>。では、人間の子として生まれ、ガヤー (gayā) で初めて究極の真理に達したブッダは「永遠のブッダ」とどういう関係にあるのか。

あらゆる経典の中で『法華經』を最も重んじた智顗 (538-597) は、この問題について考えを進めた結果、「本体と現象体との関係」という結論に達した。「永遠のブッダ」を「本〔體〕」と考え、人間としてこの世に生まれて死んだブッダを「〔本体の存在を示唆する痕〕跡」と考えるのである<sup>17)</sup>。そして、「本」が「跡」として現れることを“垂跡” (跡を垂れる) と言う<sup>18)</sup>。

智顗の『妙法蓮華經文句』を読んで「本と跡」の対立を知った日本人は、これを流用してインド出身のブツ/ボサツと日本のカミとの対応を定めようとした。これを“ホンヂ-スイジャク” (本地垂迹) という。日本人は智顗のアイデアを継承しているつもりであるから、「ブツ/ボサツをホン (本) とし、カミがジャク (跡) として現れる」と言うつもりであろうが、これはあくまで言葉の上での建前に過ぎない。

智顗の「本」は「永遠のブッダ」であるから一人しかいないが、日本のホンはブツ/ボサツであるから数が多く、これでは本体と現象体の関係は認められない。18世紀日本の説話集『瑞應塵露集』では、インド出身のヤクシと中国のシンノウ (神農) と日本のオホナムチがホン-ジャクの関係にあるという。“薬師神農大已貴尊ハ即チ同體ニシテ” と言い、対応する項目は2項目ではなく3項目であり、三者は同格であって「本」と「跡」の割り付けがされていない。“同體ニシテ唯本迹ノ異名ナリ” と言うのであるから、実質

は同じで名前が違うだけということになる。同じ礼拝対象にインド名と中国名と日本名があるに過ぎないのである。

『瑞應塵露集』にはヤクシの来歴について実に詳しい説明がされている。ヤクシはジャウルリ世界（浄瑠璃）を出発して日本へ行き、イザナギ（伊弉諾）とイザナミ（伊弉冉）の子供として生まれる<sup>19)</sup>。これが荒ぶるカミのスサノヲである。同じヤクシが京都の祇園でゴツ-テンワウ（牛頭天王）<sup>20)</sup>として顕現して、首都防衛の任に就いて人々の命を守る<sup>21)</sup>。また、ホンであるヤクシがボサツであった時に立てたセイグワン（誓願）に基づき、ゴツ-テンワウの主務は「疫病を拂ふ」ことであり、「王城の守護」は副務であるという<sup>22)</sup>。

日本のカミは同時に複数の地点に存在することができ、しかもそれぞれが習性を異にして活動する<sup>23)</sup>。ヤクシも日本のカミであるから、一方では荒ぶるカミのスサノヲとして乱暴に生き、他方では人助けのゴツ-テンワウとして人命保護に専念するのである。

『瑞應塵露集』によると、ヤクシは合わせて七つの違った姿をとる<sup>24)</sup>。① スサノヲ、② ゴツ-テンワウ、③ オホナムチ、④ エンマ（閻魔）、⑤ ダイコクテン（大黒天）、⑥ シンノウ、⑦ スミヨシ-ダイミャウジン（住吉大明神）。これでは智顗の言う「垂迹」というよりも、日本のヘングェ（變化）であり、まるでクワンノン（観音）のように得意の技術を披露して楽しんでいるようである。

さらに、タカマガハラで乱暴を働いたスサノヲはネノクニ（根國）に追放されて、死の世界を取り仕切るエンマ（閻魔）となった<sup>25)</sup>。ヤクシ-スサノヲ-エンマというヘングェの連続を設定する以上、スサノヲは「跡」でもなければ「本」でもない。しかしながら、『瑞應塵露集』に窺われるホンデスイジャク説では、このスサノヲはヤクシに対してはジャクであり、エンマに対してはホンである。

次々にヘングェが続く場合は、時間的に早い方がホンであって後の方がジャクである。同じ役者が次々に役を変えるようなものであり、前の役から次の

役が変わる時には連想が働くが、役替えを繰り返しているうちに全く違った役柄となる。

こうなると、智顗の「垂迹」から示唆を得たとしても、そして同じ漢字を借りているにしても、日本の文献に見られるスイジャクは、日本人が独自の発想に基づいて考え出した別の体系と言えよう。

さらに、最澄が帰依したので、ヒヨシ-ダイミャウジン（日吉大明神）は感激のあまり姿を表した。これもヤクシの別の姿であり、真っ黒な体に袋を背負って、ダイコクテン（大黒天）<sup>26)</sup>とそっくりであった<sup>27)</sup>。その他にも、人々の要望に応じて、水神、火神、風神、山神にヘンゲする<sup>28)</sup>。

## C

### 医療の専門家から救命の守護者へ

さて、この物語集の第2巻には、鳳来寺に籠ってヤクシに助けられた男の話が採録されている。ヤクシのお告げのお陰で、殺意を抱く妻に殺されずにすんだというのである。

〔要約:〕<sup>あまがさ</sup>天笠という武士が会津にいた。伏見城の建築を監督するために出張していたが、仕事が終わって都から帰る途中で、三河の吉田に泊まった。その夜、夢にヤクシが現れて、「重大なことを告げるから、鳳来寺に登れ」と言った。明るる日に鳳来寺へ行き、夜になって堂に籠もっていると、ある男が呪文を唱えて熱心に祈っていた。わけを聞くと、男は身の上話をした。

「私は鏡磨きです。奥州を旅していた時、会津で天笠という人の妻が私を呼んで、毒薬を分けてくれと懇願しました。浅はかにも大金に目が眩んで、言われた通りにしました。そして、甘酒に混ぜて飲ませることまで教えたのです。後になって罪の恐ろしさに脅え、ここへやって来て、ヤクシに祈っているのです。」

武士が会津の家へ帰ると、さっそく妻が甘酒を勧めた。「お前が先に飲め」と言うと、引くに引けなくなった妻はそれを飲み、たちまち

血を吐いて死んだ。命が助かったのを喜んだ天笠は、ますますヤクシに帰依し、鳳来寺に寄付して本堂の柱を金箔で飾った<sup>29)</sup>。

これは鳳来寺に籠って災いを逃れた例である。日頃「峰のヤクシ」を信心していた天笠は、お陰で妻の毒殺計画を事前に知り、死を免れることができた。ヤクシに帰依すれば、命を守ってくれるのである。

医療専門の超越者として登場したヤクシは、病気を治療して命を助けるだけでなく、あらゆる場合に命を助けることになる。『瑞應塵露集』には海で遭難した人々がヤクシに救われて命を全うする話がある。

〔要約:〕大阪を本拠に活動する船方がいて、いつも和泉の東明寺のヤクシ像に帰依し、お守りを貰って身につけていた。ある航海の際に、江戸に向かう途中で遠江沖で台風に襲われ、僚船が次々に沈み、この船方の船だけが残った。一心不乱にヤクシに祈ったところ、うまく風が収まった。身につけていたヤクシのお守りは破れて切れ切れになっていた。〔お守りにエンゲした〕ヤクシが身代わりになってくれたのである。ヤクシが救うと言われる「九種の横死」の一つは水死であるが、このことは本当であった。このことが世間に広まると、人々はますます熱心にヤクシを信心した<sup>30)</sup>。

ここで言及される「九種の横死」(nava-akāla-maraṇa/九横死)というのは、『バーイシャジャグル-スートラ』/『薬師經』に挙げられる9項目の「不時の死」(akāla-maraṇa)のことである<sup>31)</sup>。「不時の死」のリストにあるのは、④ 焼け死ぬ場合や ⑤ 溺れ死ぬ場合、さらには ⑦ 山から転落して死ぬ場合や ⑨ 手元に食べ物がなく餓死する場合など、注意すれば避けられる死である。

万有引力の法則と同じように、「行いと報いの対応法則」はあらゆる場合に当てはまるので、ブッダといえどもこれに干渉することはできない。過去の「行い」(karman/業)の結果としてもたらされる「報い」(phala/果)は、ブッダであるバーイシャジャグルもこれを停止することはできないのである。

もっとも、『バーイシャジャグル-スートラ』によると、「不時の死」のリストに挙げられているような死は、当人の「行い」とは無関係（非業）に起こる偶然の災難、当人が責任を負いようがない不慮の事故である。そのような場合に限り、バーイシャジャグルは死の停止に関与できるというのである。日本語に“非業の死”という言葉が完全に定着していることから見ても、『薬師經』の「九横死」については日本でよく知られていたようである。

# D<sup>1</sup>

## 救い難い女を救済するヤクシ

天竺という武士が命拾いする話で、鳳来寺のヤクシは「生命の守護者」として描かれているのであるが、たまたま加害者が女であるので、「女は救い難い」という「おち」が付く。そして、これを基にさらに話題が展開し、ヤクシは「女の救済者」として描かれる。

<sup>〔マコト〕</sup>寔ニ怖ルベキハ女人ナリ <sup>オホムネ</sup>大都是ノ如ク果報拙キ境界ナレバ 若其女  
軀ヲ厭フテ 男子ヲ欲フ者アラバ 当ニ此瑠璃尊ニ祈ルベシ 速ニ其望  
ヲ成セシメ玉フナリ …… 現ニ變成男子ノ益ヲ蒙リ未來ハ成佛セシ  
メ玉フナリ<sup>32)</sup>。

“現ニ變成男兒ノ益ヲ蒙リ未來ハ成佛セシメ玉フナリ”という結びの言葉は、“現ニ即身成佛シ、未來ハ淨土ニ往生ス”という成句<sup>33)</sup>の一部を入れ替えたものである。宗派を創設した時から真言宗は「密教」<sup>34)</sup>を標榜して、“即身成佛”<sup>35)</sup>という言葉を経標語として掲げてきたが、仏教が受け入れられなかった日本では、「密教」も「即身成佛」（今の身のままでブッダになる）もなかった。このことを如実に表すのが“現ニ即身成佛シ、未來ハ淨土ニ往生ス”という対句である<sup>36)</sup>。

“即身成佛”を“變成男子”と入れ替え、“淨土ニ往生ス”を“成佛ス”と入れ替えると<sup>37)</sup>、“現ニ變成男兒シ、未來ハ成佛ス”という新命題が得られる。動作主体を当人から崇拜対象に移し、崇拜の念を込めた文に書き直すと、“現ニ變成男子ノ益ヲ蒙リ、未來ハ成佛セシメ玉フ”というテキストにある



言葉となる<sup>38)</sup>。

このようにして、生きているうちに性転換が起こることを保証する言葉が得られ<sup>39)</sup>、日本で哀れな存在と考えられた女たちに希望を与えることになった。生きている間に（現ニ）性転換をしてもらい、死んでから（未來ハ）ワザハヒ（災）が全くない世界へ行かせてもらうのである（成佛セシメ玉フ）。

ここでヤクシは救い難い女を男に変える超自然的存在である。“現ニ变成男子ノ益ヲ蒙リ”というのは、パーイシャジヤグルの第8目の「決心」（*praṇidhāna*/誓願）<sup>40)</sup>を根拠にしたものである。しかしながら、仏教の体系を前提とする限り、この「決心」を根拠にしてヘンジャウナンシノ-ホフ（變成男子の法）を可能にすることはできない。

このブッダがボーディサットヴァ（*bodhisattva*/菩薩）であった時に、第8目の「決心」をして、「私自身がブッダになるまでに、今は女の身体をとっている者たちを男の身体をとるようにしてやる」とは言っているわけでは、ない。

このボーディサットヴァは、いつブッダになるかその時は分からなかったのであるから、男の身体をとらせる期限を定めようもなかった。それに、ブッダにならない限り、女たちは未来永劫に「轉生」し続けるので、慌てる必要は全くない。ところが、日本人は勝手に期限を切って、「女たちが死ぬまでに男にしてもらえろ」と思い込んだのである。この思い込みは日本独自の事象であり、それ自身かなり長い歴史がある。

『サッドルマプンダリーカ-スートラ』（*saddharmapuṇḍarikasūtra*/法華經）の第11章には“女は今でも五つの地位に就けない”（*pañca sthāni stryadyāpi na prāpnoti*）という言葉がある<sup>41)</sup>。クマーラジーヴァ（*kumārajīva*/鳩摩羅什）はこれを“女人身猶有五障”（女人の身、なほ五障有り）と訳した<sup>42)</sup>。「女の身体では近づけない五つのものがある」という意味である。

文脈から見て、「五つのもの」とは「五つの地位」のことであり、インドラ（*indra*/帝釈）やブラフマン（*brahman*/梵天）の地位、そしてブッダの

地位など、最も到達が困難な五つの目標を五つ挙げたものである。このような最難関の目標を目指して準備する際に、健康に恵まれないと不利であるというのが仏教の基本的立場であり、生殖にかかわる苦しみを伴う女の身体も不利であると言われる<sup>43)</sup>。

ところが、この“五障”（〔女の身体では〕近づけない五つのもの）を日本人は「〔女にに内在する〕五つのサハリ」と理解した。こうして、身体の話は心の話にすり替わり、嫉妬深さや浅はかさや愚かさなど、五つのサハリ（障）が妨げとなって、女はジャウブツ（成佛）できないと決めつけられたのである。身体上の不利という生物学的問題が人格的な欠陥にすり替わった<sup>44)</sup>。こうして、仏教の全く預かり知らぬ所で、日本人は「女には救いが無い」という思い込みを抱くようになった。

そして、救済不可能な女さえ救済できる超自然的存在として、アミダ（阿彌陀）やヤクシ（薬師）の彫像が礼拝された<sup>45)</sup>。中世になると、救済されるには性転換をすればよいということになって、“ヘンジャウナンシノ-ホフ”（變成男子の法）と呼ばれる奇想天外な呪術が開発されたのである<sup>46)</sup>。

「女には救いが無い」などという構想は、仏教の伝承を受け継ぐものではない<sup>47)</sup>、日本の固有文化に根差すものでもなく<sup>48)</sup>、平安時代の日本人が勝手に陥った思い込みにすぎない<sup>49)</sup>。こうして、インド文化と縁のない日本人は、『法華經』を読み違えた結果、問題の“五障”を「五つの障り」と理解し、これが日本文化圏に定着して、以後は誰も疑うことのないまま今日に至る<sup>50)</sup>。

さすがの日本にも、女をジャウブツさせるために性転換呪術を行った事例はなく、もっぱら男子の誕生を祈願するために行った。女であるかも知れない胎児を妊娠中に確実に男にしようとしたのであり、ヘンジャウナンシノ-ホフが政治的謀略に利用されることもある。

中宮の懷妊祈願と称して、後醍醐はいろんな呪術を行わせたが、その中にヘンジャウナンシノ-ホフも含まれていた<sup>51)</sup>。ところが、後醍醐には息子がすでに四人もいて、次は女でもよかったのである。腹黒い後醍醐の真の意図

は別にあり、関東調伏の呪術を行わせることにあった。中宮の<sup>よし</sup>禧子に男子の誕生を願ってヘンジャウナンシノ-ホフを行わる振りをしつつ、この呪術で狙っていたのは別の効果であり、秘せられた目的は鎌倉幕府を滅ぼすことであった。はたして、三年経っても中宮には何の萌しもなく、男がうまれるどころか、子供が産まれる気配すらなかった<sup>52)</sup>。それにしても、自分の都合に合わせて呪術の機能を勝手に変えるとは、何ともいいかげんなものである。

中宮となった平徳子(1155-1213)が妊娠した際に、ヘンジャウナンシノ-ホフが行われ、その間の経緯が『平家物語』で語られている<sup>53)</sup>。さすがは天台座主の覚快が執行しただけのことはあり、この呪術は大いに効き目があって、生まれた子供は男であった。幼児は3歳で即位させられて天皇となる。これが第81代の安德であり、4年後に檀の浦で死ぬことになる。

## D<sup>2</sup>

### 「餘佛」と違うヤクシ

こうして、ヤクシは“男子ヲ欲フ〔女ニ〕速ニ其望ヲ成セシメ玉フナリ”と言われ、男になりたがっている女たちの願いを叶えてくれる。死んだ後でないと男にしてくれない他のブツ（佛）とは違って、さっさと男にしてくれるのであるから<sup>54)</sup>、女にとっては特別のブツということになる。

其<sup>ソノ</sup>餘佛<sup>ヨホトケ</sup>ノ誓ヒ玉フ願ヒ中ニ 女身ヲ厭ヒ惡ム者<sup>イノチ</sup>壽終リテ後男子トナラシメント<sup>タテ</sup>立玉フトハ<sup>カフ</sup> 請一様ニ信ヲナスコトナカレ<sup>ア ア</sup> 嗚呼アリガタキコトニシモアラズヤ<sup>55)</sup>。

他のブツは“壽終リテ後男子トナラシメント立玉フ”と言われ、ヤクシが一際違った存在であることが強調され、“一様ニ信ヲナスコトナカレ”と注意される。ここで“餘佛”と言われているのはアミダ（阿彌陀）のことであり、この方は生きている間に男にしてくれないから、だたヤクシだけを信心していればよいと勧められる。

ボーディサットヴァ時代のアミターバ（amitabha/阿彌陀）にとって、最終目標は「ブッダになること」である。そして、自分がブッダになるため

には、ほかの人々もブッダにしてやらなければならない。「ブッダの国」(buddha-kṣetra/佛國土)へやって来た人々には、ブッダになる準備をする上で不備がないようにしてやるつもりでいる。言うまでもなく、女たちの将来についても同じことを望んでいる。女の身体ではブッダになる準備をする上で不利であるので、「ブッダの国」にいる女たちには、いつか必ず男の身体をとらせてやるつもりでいる。これが『大無量壽經』言われている第35の「決心」である<sup>56)</sup>。

『瑞應塵露集』で“壽終リテ後男子トナラシメン”と言うのは、この第35の「決心」を受けたものである。アミダなどを当てにしていたのでは、死んだ後でゴクラク（極樂）へ行ってからでないと性転換を保証してくれない。何しろ、「轉生」を信じている仏教文化圏の人々と違って、日本人は時間が限られているので、生きている間に何とかしてもらわないと困るのである。

バーイシャジャグルがアミターバと違う点があるとすれば、今この世で不利な状態にある人々を励ますことである。バーイシャジャグルの意図は人々をいつかブッダにすることであり、そのためには恵まれた条件の下で心置きなく準備に専念させたいというのが切なる希望である。ブッダを目指して努力する際に不利な女の身体も、何とかしてやらなければならない事の一つであるが、アミダーと違ってバーイシャジャグルが面倒を見ようとしているのは、「ブッダの国」にいる女たちではなく、この世にいる女たちである。

このようなバーイシャジャグルの「決心」を受けて、日本人はヤクシを特別なブツと考えた。生きている間に面倒を見てくれるヤクシが特別の存在であると日本人は考えて、“一様ニ信ヲナスコトナカレ”という『瑞應塵露集』の言葉となったのである。

しかしながら、『バーイシャジャグル-スートラ』(baiṣajyagurusūtra/藥師經)はインドの文献であり、すべては無限の時間を前提として語られている。バーイシャジャグルの望んで止まないのは、人々がブッダになる準備を進めることであり、それができるように不利な条件が除かれることを何よりも望んでいる。しかしながら、今すぐ不利な条件を除いてやるなどと約束し

ているわけではない。したがって、女がブッダになることについて、アミダーバと違った考えがあるわけではなく、まして独自の特種技術を備えているわけではない。

『バーイシャジャグル-スートラ』には、このブッダが取り除こうとする不利な条件として、病気や身体障害がいろいろ列挙されている<sup>57)</sup>。そして、ブッダになる準備をする上で不利な条件の一つが、妊娠や出産を伴う女の身体であるという。準備の能率を上げるのは、「轉生」の際に「心」(vijñāna/識)は男の身体に移るのが望ましいということになる。「轉生」とは死んだ身体を離れた「心」が次の身体に移動することである。なお、仏教で性別があるのは身体だけであり、「ブッダの国」へ行くのも(往生)ブッダになるのも(成佛)、性別のない「心」であって、性別のある身体ではない。

バーイシャジャグルの教えに従って努力を続ければ、今たまたま女の身体に宿る「心」はいずれ必ず男の身体に移り、ブッダになるための準備がはかどる。そして、遙か未来には必ずブッダになることができる。しかしながら、日本人にとって、インド人の考える無限の時間は想像を越えるものであり、限りなく生まれ変わってブッダになるつもりなど男にも女にもない。日本人は仏教の体系とは別の次元でジャウブツ(成佛)について考え、女がジャウブツすることについて思いを馳せている。

日本ではカミ(神)が恐ろしく短気であるが、人間もまたせっかちである。人間が気に入らないことをすると直ちにワザハヒ(災)をもらたし、気に入ることをすると直ちにサイハヒ(幸)をもたらす。人間の方も、苦勞してカミの気に入ることをするのは、いつかは知れない遙か遠い未来の報酬を期待しているのではなく、直ちに報いがあると思っている。少なくとも生きている内に何とかしてくれないと困るのである。

## E

ヤクシに願いを聞き入れられて感激のあまり作った物語

鳳来寺のヤクシ像をめぐる有名な話に、子供を授かった夫婦の物語がある。

伝えられる編纂動機から見て、この物語の原型はヤクシの超自然力を説くのが主旨であったちがいないが、時代とともに改変され、ジャウルリヒメと牛若丸の恋物語となり、『十二段草紙』と呼ばれるようになった。

〔要約:〕三河の国司であった兼高は遊女と結婚した。夫婦で鳳来寺に100日間籠ってヤクシに祈り、子供を授かり、「薬師」の本拠（浄瑠璃世界）にちなんで“ジャウルリヒメ”（浄瑠璃姫）と名付けた。娘は美しく成長して、東国へ下る途中の牛若丸と恋に落ちた。

牛若丸はジャウルリヒメに別れて旅を続けたが、駿河で病気になった。源氏の氏神、鎌倉若宮の八幡に知らされて、ジャウルリヒメが駆けつけた。必死の看病の甲斐あって、牛若丸は元気になり、再びジャウルリヒメと別れて、平泉への旅を続けた<sup>58)</sup>。

一読した限りでは、恐ろしく単調で退屈な作品である。叙述が平板で、構成が良くなく、劇的緊張に乏しい。これが大人気を博したとすれば、語りによほど絶妙な技術を凝らしたのであろうか。

万治年間（1658-1661）に公刊された能の本『猿轡』の本に、ヤクシのお陰で目が開いた話があり、この『十二段草紙』の由来を伝えている。それによると、文安年間（1444-1449）に宇田勾当という盲目の語り芸人がいたが、ヤクシの「決心」を当てにして、京都の因幡堂に籠って熱心に祈願したところ、首尾よく目が開いた。あまりの嬉しさに、ヤクシの超自然力を説く物語を12段に構成して、自ら各地で語ったという。この物語の表題は『やすだ物語』であった。

先じやうるりの義は文安年間に宇田勾当と云〔ふ〕座頭侍り。盲目たることをかく悲しみて、印幡堂の薬師如来の誓の深き事をとうとみて、数年肝膽をくだき祈り侍りしが、有時三七日通夜し侍りて歎じて云、予人倫に生ながら目瞳もうもうたり。五體不具にしてはいけるかひなし。哀願願くは予が眼目をあけてたび給へと、血の涙を流して祈ければ、如来も哀とや覺しけん、三七日の暁、山のはにかゝる有明の月あざやかに見え侍り。勾当あまりのうれしさに、平家の十二の巻に準じ

又は薬師の十二神に評して、やすだ物語と云〔ふ〕事を十二段にしてかたりき<sup>59)</sup>。

この物語の構成が12段から成るのは、ヤクシを助ける12人の軍司令官の数にちなんだと言われ、『平家物語』の巻数に合わせたとも言われる。『バーシャジャグル-スートラ』に登場する12人の軍司令官（mahāyakṣa-senāpati/薬叉大将<sup>60)</sup>）と違って、日本のジフニ-シンシャウ（十二神將）は強きを助け弱きを挫くのを身上とする日和見武闘派に過ぎず<sup>61)</sup>、呪詛を扱う技術者として利用されることさえある<sup>62)</sup>。

この『十二段草紙』で物語の中核を成すのは、兼高夫婦がヤクシ像に祈願して子供を授かったことであり、もともとは鳳来寺に籠って願いが叶った話である。『日本靈異記』の表現を借りれば、このヤクシ像は「願ふところをよく與へたまふ」<sup>63)</sup>存在であり、日本のヤクシ伝承を正しく伝えている。人々がブッダを目指して頑張りやすい状況を整えようとするバーイシャジャグルの志は、ブッダを目指す気がまるでない日本人に通じなかった。せっかくの「バーイシャジャグルの決心」も、幸せな人生を送るのに利用されただけであった<sup>64)</sup>。

ヤクシから授かった娘の名をとって、この話は“ジャウルリゴゼン-モノガタリ”（浄瑠璃御前-物語）とも呼ばれたが、やがてヤクシの仕切っている「ブッダの国」の名前“ジャウルリ”は芸能ジャンルの名称となった。こうして、バーイシャジャグルの志は理解されなかったにもかかわらず、「ラピス・ラズリの光を放つ都」の名前は、“ジャウルリ”という形で<sup>65)</sup>日本で広く知れ渡ることになった。

#### 略号

『國大』:『國史大系』（新訂増補），1942.

『古大』:『日本古典文學大系』，1952-1967.

『大正』:『大正新脩大藏經』，1924-1935.

*BhS: Bhaiṣajyaguruvaiddūryaprabharājasūtra*, ed. N. Dutt, Calcutta, 1939.

注

1) ヤクシにかかわる話のほかに、この説話集には「光明眞言ノ靈驗」と「寶篋印呪ノ靈驗」の話が集められている。第4巻は大部分が「光明眞言傳」から成り、この「眞言」の功德の例証となる話が10点集められていて(4, 7丁表-21丁裏)、第5巻と第6巻では「寶篋印呪ノ靈驗」にかかわる奇跡話が集められている。

「光明眞言」を唱えて超自然力を付与した土砂を撒くと、病氣や災難で絶体絶命にある者がたちまち危機を脱し、悪い「亡者」もままと「西方極樂」に移動する。中国には小型の塔を金属で作って呪文のテキストを入れる習慣があり、“寶篋印陀羅尼”と呼ばれるが、これが鎌倉時代に日本にも伝わった。

この二つは真言宗に伝わる呪文であり、よくセットで挙げられ(『沙石集』2.8, 『古大』85, p. 121), 病氣や災難を除去する点で同じ効果があると考えられていた。日本オーソドクシーで了解されている限り、これは正にヤクシの機能である。この説話集に集められているのは、ワザハヒの解消に最も高い効果をもたらすブツ(佛)と呪文の奇跡譚である。

2) 超海通性, 『瑞應塵露集』1, 浅野彌兵衛刊本, 大坂, 1733, 序。

loc. cit.: 享保十五年庚戌年仲春世尊成道日 和泉國大鳥群八田莊平井邑寶林山安樂寺通受比丘超海通性書。

3) ibid., 2, 14丁裏, 「參州鳳來寺ノ開山理趣仙人因縁ノ事」。

4) 『東塔五谷堂舎并各坊世譜』, 『天台宗全書』24, 東京, 1937, p. 49, b.3-7: 叡岳要記云 同七年歲次戊辰 奉爲桓武天皇 創建根本一乘止觀院 今謂中堂是也 同記云 檜皮葺十一間堂 安置藥師佛 立高五尺五寸 身金色 衣紋綵色 大師自造

5) 『金剛峰寺建立修行縁起』, 『弘法大師傳全集』1, 京都, 1935, p. 54, b.1-2: 三間四面講堂一字 柱長一丈六尺 奉安置一丈六尺阿閼如來 八尺五寸四菩薩 七尺二寸不動降三世 并七軀

6) 五来重, 「藥師信仰総論」, 『藥師信仰』, 『民衆宗教史叢書』12, 東京, 1986, p. 16-17.

7) 『寛治二年白河上皇高野御幸記』, 五来重, 『高野山と真言宗の研究』, 東京, 1976, 資料編, p. 439: 影堂前二許丈有一古松 …… 次入御藥師堂禮佛之後 卽還御

8) 中国の「悔過」から着想を得て、日本人は“ケクッ”と呼ばれる独自の呪術を開発した。中国の「悔過」は「過ちを悔いること」を不可欠な要素として、未来の災害を予防するために行われる。中国人は「行いと報いの対応法則」を逆手にとって、「罪を消去すれば、災害も起こらない」という命題を立てた。

ところが、日本の“ケクッ”では「過ちを悔いること」が必要とされず、すでに



起こっている災難を終息させるために行われる。日本人は仏教の原理を視野に入れなかったし、それを逆手に取って中国人が構築した理論を受け入れることもなかったのである。

- 9) 『古事記』上, 『國大』7, pp. 34-35: 吾者 伊都岐奉于倭之青垣東山上<sup>あれ</sup>《吾を倭の青垣の東の山の上<sup>まつ</sup>にいつき奉れ。》

- 10) *ibid.*, 上, p. 110.

“オホ-ヤマクヒ”の“ヤマクヒ”という語は, 「山の境界を示すために打ち込んだ杭」を指すという(西宮一民, 『古事記』, 「付録」, p. 387)。このカミはスサノヲの孫である。もう一つの名前は“ヤマスエノ-オホヌシ”(山末之大主)であり, 「山頂の大支配者」という意味である(*loc. cit.*)。

- 11) 『太平記』の「比叡山開闢事」によると, 最澄が世に出る1800年前にヤクシは本拠地のジョウルリ-セカイ(浄瑠璃世界)から琵琶湖畔に突然やって来た<sup>と</sup>と伝えられている。

『太平記』18, 『古大』35, p. 267: 東方浄瑠璃世界の教主醫王善逝忽然として来り給へり。

「ラピス・ラズリ」を指す語“vaidūrya”は中国語で“瑠璃”と訳された。パーイシャジャグル(bhaiṣajyaguru/薬師)はブッダであり, 「ブッダの国」(buddha-kṣetra/佛国土)を主催するが, その名前“vaidūryanirbhāṣa”は「ラピス・ラズリの光を放つ[都]」という意味であり, 中国語では美称“浄”を付けて“浄瑠璃世界”と訳された。その省略語形が“浄-瑠璃”である。

- 12) オホヤマクヒとヤクシだけで十分なはずであるが, 後代になるとさらにミワミャウジン(三輪明神)が加わる。ヤクシが遠い所から勝手にやって来たのに対し, ミワミャウジンの方は比叡山の人々がわざわざ頼んで大和から招いたカミである。

- 13) 超海通性, *op. cit.*, 2, 15丁裏.

- 14) 『日本書紀』1, 『國大』1, [前篇] pp. 46-47: 夫大己貴命與少彦名命 戮力一心經營天下 復爲顯見蒼生及畜產 則定其療病之方 …… 是以百姓至今咸蒙恩賴<sup>か</sup>《夫<sup>おほなむち</sup>の大己貴命, 少彦名命と力を戮<sup>すくなひこな</sup>せ, 心を一にして天下を經營<sup>あは</sup>る。復<sup>あは</sup>, 顯見蒼生及び畜産<sup>ひとつ</sup>の爲に, 則ち其の病を療むるの方を定む。…… 是を以て, 百姓, 今に至るまで, 咸く恩賴<sup>つ く</sup>を蒙れり。》

- 15) 『日本文徳天皇實録』9, 『國大』4, p. 103: 己卯 在常陸國大洗磯前 酒列磯前兩神號藥師菩薩名神《己卯, 常陸國に, 大洗磯前, 酒列磯前の兩神在り, 藥師菩薩名神と號す。》

- 16) 『妙法蓮華經』16, 『大正』9, p. 42, b.9-13: 我實成佛已來 久遠若斯《我は實に

成佛してより已<sup>このかた</sup>來、久遠なること斯<sup>かく</sup>の若<sup>ごと</sup>し。》

17) 智顗,『妙法蓮華經文句』9 下,『大正』34, p. 129, a.29-b.3.

18) loc. cit., b.3.

19) 超海通性, op. cit., 3, 1丁表-裏.

20) ゴツ-テンワウは新羅の牛頭山から移されたという伝承があり、もともと朝鮮からの渡来人の信仰対象であったという(松前健,『日本の神話と古代信仰』,東京,1992, pp. 153-154)。朝鮮で“牛頭山”とか“牛首山”と呼ばれるのは雨乞いの場所であり、旱魃の際には切断した牛の頭を供えるという(ibid., p. 158)。これが日本に伝わり、旱魃の際に牛の頭を供える場所が和歌山や福島県にあったという(ibid., p. 158)。

ゴツ-テンワウは仏教の伝承と関係がなく、“牛頭天王”の“牛頭”は、仏教で知られる“牛頭”とは別のものである。仏教の「地獄」(naraka/奈落)で働く責め役に、“ゴーシールシャ”(go-śirṣa)と呼ばれるグループがいる。「牛の頭をした者」という意味で、中国語で“牛頭”と訳された。これはヤマ(yama/閻魔)の家来であるから、「天王」ではない。

21) 超海通性, op. cit., 3, 2丁表, 2, 21丁表.

22) ibid., 2, 21丁裏.

23) スミヨシノ-カミ(住吉神)は摂津の外に長門にも存在する。戦闘神としてのスミヨシノ-カミは“アラ-ミタマ”(荒御魂)と呼ばれ、神功皇后が新羅を攻撃した時に軍船を先導した。救命神としてのスミヨシノ-カミは“ニキ-ミタマ”(和御魂)と呼ばれ、船を海難から守った。長門にいるのがアラ-ミタマであり、摂津にいるのがニキ-ミタマである。

アラ-ミタマの方は戦闘の際に頼りにされ、ダイイトク-ミャウワウ(大威徳明王)と同一視される。そして、ニキ-ミタマの方は命が危険にさらされる際に頼りにされ、ヤクシと同一視される。天武が危篤に陥った時、人々はスミヨシノ-カミに祈願したが、頼りにされたのはニキ-ミタマの方であった。

24) 超海通性, op. cit., 3, 4丁表.

25) ibid., 3, 3丁表.

26) 日本のダイコクは、福をもたらすカミとして「七福神」のグループに加えられ、「願ふところをよく与へたまふ」ヤクシと結びつけられている。にこにこ笑みをたたえ、いつも背中に大きな袋を背負い、右手に打ち出の小槌を持っていて、実に愛すべきカミである。名前からの連想があってか色は黒い。

また、ダイコクはオホナムチと同一視される。別名“オホクニ-ヌシ”(大國主)

の“大國”（オホクニ）を音読した“ダイコク”と同音であるからと言われるが、そのように無理な語呂合わせをしなくても、オホナムチ-スクナヒコナはすでに早くからヤクシと同一視されていた。ヒヨシノ-カミ（日吉神）はすでに複数のカミが集まってできた融合体であったが、『瑞應塵露集』によると、さらに「ダイコクと融合したヤクシ」がこれに融合している。

ところが、中国では「大黒天」は恐ろしげで怒り狂った表情をしていて、破壊の神であるシヴァ（śiva）の面影を伝えている。そのインド名も“摩訶迦羅”と言われ、シヴァの別名“mahākāla”をよく写している。ただし、この別名の意味は「偉大な黒色」ではなく、「[すべてを飲み尽くす]偉大な時間」である。

27) 超海通性, op. cit., 3, 3丁裏.

28) ibid., 3, 4丁裏.

29) ibid., 2, 17丁表-20丁表, 「同寺ノ薬師ノ告ニ依テ毒飼ノ難ヲ免レシ事, 并ニ薬師ニハ現ニ女身ヲ轉シテ男子トナラシム願アル事」.

30) ibid., 3, 22裏-23裏.

31) *BhS*, p. 28, l. 10 ~ p. 29, l. 9.

32) 超海通性, op. cit., 2, 19丁裏.

33) 現在でも真言宗を「宗旨」とする家では、栄厳（1814-1900）の『密宗安心教示章』（『真言宗常用聖典』, 香園寺, 1927, pp. 292-293）から一節（本来胸中章）を抜いて、死後儀礼に際に唱えるが、その中に“現世に於て即身成佛し、未來は密嚴淨刹に往生せん”という言葉が含まれている。

『安心教示章』1「本来胸中章」, 高野山, 1971, pp. 45-46: 光明眞言を唱ふれば, [大日]如來の本願 空しからざる故に 無始已來造り累ねし煩惱罪障の黒闇も五智圓滿の大光明に照らされて知らず識らず消滅し 現世に於て即身成佛し 未來は密嚴淨刹に往生せんこと疑いなしと深く信すべきなり。

34) 大乘仏教ではブッダになることが究極目標であるが、そのためにはほぼ無限の時間をかけなければならないので、限りなく「轉生」を繰り返すことが前提とされる。ところが密教では、象徴を操作することによって、効率よく目的を達成しようとする。

真理そのものを擬人化して、これをブッダに見立てる。こうして立てられたのが「真理を身体とする〔ブッダ〕」（dharma-kāya/法身〔佛〕）という構想である。このブッダの身体は肉や骨ではなく真理から成るというのである。このようにして構想されたブッダは真理そのものであるから、姿もなければ形もない。そこで、象徴記号を設定して、それを操作することによって対処する方法が考え出された。手を動

かして指サイン (mudra) を作り、図形象徴 (yantra) を心に浮かべ、音声象徴 (mantra) を口にするのである。

- 35) 真理を身体とするブッダ、マハーヴァーイローチャナ (mahāvairocana/大日) を表す象徴記号を操作して、マハーヴァーイローチャナそのものになろうとする。こうして、限りなく「轉生」を繰り返すまでもなく、今の身体のまま (即身) 「佛」になる (成佛) ことができる。これが「密教」を標榜する真言宗の建前である。

- 36) マハーヴァーイローチャナは「真理を身体とするブッダ」(dharmakāya/法身佛) であるので、「以前の決心」(pūrva-praṇidhāna/本願) に関与しない。限りないほど「轉生」を繰り返して努力を重ねた結果としてブッダになったアミターバ (amitābha/阿彌陀) と違って、マハーヴァーイローチャナは身体が真理から成り、擬人化されブッダに見立てられた真理である。最初からブッダであるので、修行時代の「決心」とは無縁である。ところが、仏教が伝わらなかった日本では、「[大日] 如來の本願」が語られる。日本で“ダイニチ”と呼ばれているカミは、仏教のマハーヴァーイローチャナとは別の存在である。

それに、現世で「即身成佛」するとすれば、すなわち生きている間にブッダになるなら、死後に「淨刹」すなわち「佛國土」に「往生」する必要はないはずであるが、ここでは“即身-成佛”と“密嚴淨刹-往生”が並記されて、「現世」と「未來」に割り付けている。真言宗は「密教」を標榜してきけれども、マハーヴァーイローチャナの存在を信じていなかったし、生きている間にブッダになる気もなかったのである。

「即身成佛」によってブッダになることが可能なら、「淨刹に往生」は不要である。仏教の体系に即して「即身成佛」を唱えていたのなら、「現世に於て即身成佛し、未來は密嚴淨刹に往生せむ」などと言う必要がないし、シンボル操作によってブッダになれると信じている者は、そういうことを言うてはならないのである。

- 37) この世とは違って、「ブッダの国」(buddha-kṣetra/佛國土) は病気も災害もない所であり、何物にも妨げられずにブッダになる準備に集中できる場所である。それに、そこにはブッダがいて、直接に指導を受けることができる。そういうわけで、「ブッダの国」に滞在する限り、ブッダになる準備は飛躍的に捗るのである。ちなみに、アミターバが取り仕切る「ブッダの国」は“スカーヴァティー” (sukhāvati) と呼ばれ、中国語で“西方淨土”または“極樂”と訳された。

このように、ブッダを目指す人々にとって、「ブッダの国」は最高の施設であるが、そこへいってもブッダになれるわけではなく、準備が大いに捗るに過ぎない。

それに、「ブッダの国」にはすでにブッダがいる。そして、「同じ世界はブッダは一人しかいない」というのが仏教の約束事である。そして、「ブッダの国」が結構な所であっても、いつまでも滞在するわけにはいかない。「善い行い」の蓄えが尽きれば、そこを去って再び「轉生」して現実世界での生活を始めなければならない。こういうわけで、仏教で「ブッダの国」へ行くことは最終目標でない。

ところが、誰もブッダになるつもりがない日本で、ワウジャウ（往生）は最終目標であり、ジャウブツ（成佛）との区別が明確でない。ワウジャウとジャウブツの関係について、はっきりした言葉で自分の考えを明らかにしたのは親鸞（1173-1262）である。

細川行信/村上宗博/足立幸子:『親鸞書簡』, 京都, 2002, p. 138: 安樂淨土にいはつれば、すなはち大涅槃をさとるとも、また無上覺をさとるとも、滅度にいたるとまうすは、御名こそかはりたるやうなれども、これみな法身とまうす佛のさとりをひらくべき正因に、阿彌陀の御ちかひを、法藏菩薩われらに回向したまへるを、往相の回向とまうすなり。

親鸞は仏教の体系を無視して、ワウジャウとジャウブツを同一視しているわけであるが、これは日本では特異な発言というわけではなく、ワウジャウとジャウブツを区別する日本人は、親鸞の前にもいなかった。“淨土ニ往生ス”を“成佛ス”と入れ替えても、日本語では文意が変わることはない。

- 38) 「人間は誰でもジャウド（淨土）に行ける。ただし、女はこの限りではない」という日本オーソドクシーの基本命題に基づいて、日本人は「男になりさえすればジャウドに行ける」と思っているのであるから、“現ニ變成男兒シ、未來ハ淨土ニ往生ス”という変形文で、“ヘンジャウ-ナンシ”（變成男兒）という語が指すのは前提であり、“ワウジャウ”（往生）という語が指すのは結果である。

そうすると、この文変形が可能であることから見て、“現ニ即身成佛シ、未來ハ淨土ニ往生ス”という元の文で用いられている“ソクシン-ジャウブツ”（即身成佛）という語が指すのは準備作業であり、“ワウジャウ”という語が指すのが最終目的であるということになる。日本人が“ソクシン-ジャウブツ”というのは、「ブッダになって輪廻世界から離脱すること」ではなく、ワザハヒの全くない世界へ行くための条件作りであるらしい。

- 39) こうして、仏教世界では誰も思いつきもしなかった驚天動地の技術が日本で開発されることになった。しかも、この突飛なアイデアを思いついた日本人には、仏教の伝統を逸脱しているという意識はなく、經典根拠に基づくものと思っていた。

日本人がヘンジャウ-ナンシ（變成男兒）の根拠としたのは『藥師經』であり、

ヤクシがボサツ時代に公約した第8の「決心」(誓願)である。この「決心」を『薬師經』で読んだ日本人は、「いつでも男にしてやるとヤクシが女たちに約束した」と理解した。日本人は「轉生」を信じていないので、この約束は本人が生きている間に履行されることになる。日本人にすれば、“現ニ變成男兒シ”というのは当然のことを言ったままであり、仏教を否定するつもりなど全くない。

「私の説く教えを信じて努力すれば、今は女の身体に宿っている心は、いつか必ず男の身体に移るであろう」と確かにパーシャジャグルは言っている。しかしながら、このことが今直ちに起こるなどと言っていない。約束の実現が「生きているうちに」なされると日本人が考えたのは、一方的な早合点であった。

ブッダにならない限り「轉生」は無限に繰り返されるのであるから、インド人にとって時間は無限である。これとは違って、「轉生」を信じない日本人にとって時間は限られている。ジャウド(浄土)でのワウジャウ(往生)は、今の人生が終わる瞬間でなければならない。そのためには、女にとってヘンジャウ-ナンシ(變成男兒)は不可欠の条件である。そして、「直ちに男にしてやろう」とヤクシが約束した以上、しかるべき手続きさえとれば、ヘンジャウ-ナンシは可能である。

こうして、日本人は「女を男に変える呪術」を発明した。

- 40) 玄奘(譯),『薬師琉璃光如来本願功德經』,『大正』14, p. 405, b.5-8: 第八大願  
願我來世得菩提時 若有女人 爲女百惡之所逼惱 極生厭離願捨女身 聞我名已一切  
皆得轉女成男具丈夫相 乃至證得無上菩提《第八の大願。願はくば、我れ來世に菩提を得む時、若し女人有りて、女の百惡の逼惱する所の爲に、極めて厭離を生じ、女身を捨てむと願はむに、我名を聞き已らば、一切皆女を轉じて男と成り、丈夫の相を具すを得む。乃至、無上の菩提を證得せむ。》

P. Birnbaum, Yao-shih liu-li-kuang ju-lai pen-yüan kung-te ching, *The Healing Buddha*, Boston, 1989, p. 154: I vow that when I attain enlightenment in a future age, if there are any women, who suffer from any of the hundred woes that befall women, who are wearied at the end of their lives and wish to abandon their female form — when these women hear my name, they all will obtain transformation in rebirth from female into male physical forms. They all will personally experience the supreme enlightenment.

- 41) *Saddarmapuṇḍarikasūtra*, ed. H. Kern & B. Nanjio, ed. Kern & Nanjio, St. - Pétersbourg, 1912, p. 264.  
42) 鳩摩羅什,『妙法蓮華經』,『大正』9, p. 35, c.9-10.  
43) 『阿閼佛國經』で「阿閼佛刹の女人、妊身となり、産む時、身、疲極せず」(『大

正』11, p. 756, b.11-12) と言うのは、「女ゆえの不利な点」(stri-doṣa)の消滅した状態を指して、ブッダを目指すのに相応しい状態に言及するものである。アクショービャの国へ行けば、女たちは妊娠と出産の苦しみは逃れることができるのであり、チベット語訳『阿閼佛國經』によると、アクショービャの国(阿閼佛國)へ行かない限り、月経の不快さから逃れることができない(Dantinne, *La Splendeur de l'inébranlable*, Louvain-la-Neuve, 1983, p. 97)。

このように、仏教で「女ゆえの不利な点」として取り上げられるのは、生物学的な現象であって人格的な欠落や道徳的な欠陥ではない。女の嫉妬深さや愚かさなどに言及する仏教文献はどこにもないのである。ちなみに、仏教で性別は生殖器の違いに帰せられ、男女の違いは身体に限られる。「轉生」するのもブッダになるのも、もっぱら性別のない「心」ある。

- 44) 『瑞應塵露集』の「毒飼ノ難ヲ免レシ事」に登場する天竺の妻は、恨みが高じて夫を殺そうとする。“女ノ性ハ嫉妬多シ”と言われ(2, 19丁表)，“怨念ヲハラサントテ……呪詛シ”(2, 19丁裏)と言われる。そして、“高きも賤しき都テ替ルコトナフシテ”(loc. cit.)と言われる。すなわち、女のサハリは人格上の欠陥に帰せられている。

- 45) 蓮如の「五障三従の御文」(細川行信/村上宗博/足立幸子、『蓮如五帖御文』, 京都, 1993,)によると、女は「おとこにまさりてつみのある」存在で、「あさましき身」(p. 283)であった。サハリ(障)はツミと並列的なものであり、“罪障”という並列語合成が用いられている(p. 126)。

『蓮如五帖御文』, p. 263: 夫、女人の身は、五障・三従とて、おとこにまさりてかかるふかきつみのあるなり。このゆえに、一切の女人をば、十萬にまします諸佛も、わがちからにては、女人をばほとけになしたまうことさらになし。しかるに阿彌陀如來こそ、女人をばわれひとりたすけんという大願をおこして、すくいたまうなり。このほとけをたのまはずは、女人の身のほとけになるということあるべからず。

- 46) 男にせよ女にせよ、今の一生でどんなに頑張ったところで、ブッダになれるわけではなく、限りなく「轉生」して努力を続けなければならない。女の身体をしていてはブッダになれないとしても、男であれ女であれ今の一生の内になれるわけではなく、今の一生が終わった直後になれるわけでもないのであるから、この点について仏教文化圏の女は誰も困っていない。

ところが、「輪廻轉生」に縁のない日本人にしてみれば、「死ぬまでに性転換をしない限り、女は救われない」ということになる。今の人生が終わった直後にジャウ

ブツ（成佛）しなければならないのであれば、呪術による性転換しか女には打つ手がない。こうして、“ヘンシジャウナンシノ-ホフ”（變成男子法）と呼ばれる呪術が日本で発明された。

- 47) 女の「五障」が取り上げられている「提婆達多品」を典拠とする信仰が中国にあった事実は確認できず、8世紀の日本では『法華經』の特定の「品」を取り出して書写することが多かったが、目立って多いのが「壽量品」であり、「提婆達多品」が注目されている様子はない（曾根正人、『『法華滅罪之寺』と提婆品信仰』、『史正』12, 1982, pp. 21-26）。

また、『法隆寺東院縁起』（『佛全』117, pp. 26-28）には、内親王に法隆寺再建を働きかける話が見えるが、女に法華經信仰を説いているのに、「龍女成佛」への言及がない（ibid., p. 26）。

- 48) 9世紀初頭に成立した『日本靈異記』には、かなり多くの女が登場するが、「女ゆえの罪」どころか「女ゆえの不利」が話題になることさえない。また、ほかの經典と比べて、『法華經』への言及が圧倒的に多いが、女の「五障」が語られている話（サーガラの娘のエピソード）が取り上げられることはない。

『法華經』を読んだだけで「女には救いがない」というアイデアが出て来たとすれば、よほどの先入観がなければならないが、『日本靈異記』に見られる8世紀日本人の多様な生活局面には、そのような先入観が全く反映されていない。

日本オーソドクシーでは、動植物や鉱物どころか、瓦や土塀のような人工構造物までがジャウブツ（成佛）することになっている。したがって、人間の女だけがジャウブツできないという発想は、むしろ日本の文化伝統に矛盾すると言えよう。

- 49) 「女には救いがない」という日本オーソドクシーの命題は、『法華經』だけから導き出されたものではありえない。サーガラの娘のエピソードに日本人が異常な関心を寄せるようになったのは、『大無量壽經』を読むようになってかららしく、その背景にはアミダの名を唱える習慣の普及があろう。

円仁が比叡山に「念佛道場」を作ったのが848年であり、7日にわたって「不斷念佛」（昼夜休みなく阿弥陀の名を唱えること）を行うように言い付けて死んだのが864年である。そして、吉田一彦によると、「五障」に言及する最も古い文献は菅原道真の願文（883年）である（「竜女の成仏」、『女性と仏教』, 2, 東京, 1989, p. 62）。

しかしながら、『大無量壽經』だけからも「女の身では往生できない」という命題を導くことはできない。「ブッダの国へ行った者が再び女としてこの世に生まれるようなことはさせまい」というのがアミターバの第35の「決心」（praṇidhāna/



誓願)である。まだ「ブッダの国」へ行っていない女たちは、この「決心」と無関係であり、すでに「ブッダの国」にいる女たちにしても、男の身体を得させてもらえるのは「再びこの世に生まれる」時であり、いずれにしても今日や明日の問題ではない。「ブッダの国に行く前に、呪術をかけてもらって男に変身しなければならない」などとは仏教文献のどこでも言われていないのである。

また、ボーディサットヴァ時代のアミターバは、「人々が有名な家に生まれて来ないようなら、私はブッダになるまい」と公約したが(第42の「決心」、*Sukhāvatīvyūha*, ed. A. Ashikaga, p. 20)、ヘンジャウナンシの場合と同じ論法を使うなら、「名家出身者でない限り、見込みはない」のであるから、「名家出身者に変身すること」がジャウブツの必要条件になるはずである。しかしながら、日本人もそうはしなかった。ヘンジャウナンシの場合と違って、傍証として使えるエピソードが権威ある経典に見られなかったからである。

「女には救いが無い」という日本オーソドクシーの命題が成立するには、『法華經』のエピソード(「サーガラの子の話」)の誤読と『大無量壽經』に記述される「決心」第35(「ブッダの国へ行った者が再び女としてこの世に生まれるようなことはさせまい」)の誤解が不可欠の条件であった。「サーガラの子の話」では『法華經』の威力が強調され、8歳の女兒が『法華經』を聞いて直ちに究極の真理を会得する。

- 50) 日本人にとって、「仏教信仰」とは経典や仏像を使って呪術を行うことであり、仏教の体系を知的に理解することは関心外であった。「輪廻轉生」を受け入れないまま、日本人は経典を拾い読みして字句を下手にいじった。「女には救いが無い」という構想はその成果の一つであり、それなりに極めて日本的な文化事象である。

クマーラジーヴァが選んだ“障”という語は、「女が就いたことのない地位」を意味したが、『法華經』が正確に読まれなかった日本では、漢字“障”が経典の文脈から切り離され、日本語名詞“サハリ”が当てられた。女にとって逃れようのない服従の三形態(三従)と並べられて、このサハリは自分で制御するのが不可能であった。そして、雲や霧や霞や闇に比せられる「はらふべきもの」であり、ツミであった。

- 51) 『太平記』1, 『古大』34, p. 42.

- 52) loc. cit.: 三年マデ曾テ御産ノ御事ハ無リケリ。後ニ子細ヲ尋レバ、關東調伏ノ爲ニ、事ヲ中宮ノ御産ニ寄テ、加様ニ祕法ヲ修セラレルト也。

- 53) 治承2年(1178)になって、まだ子供がなかった中宮が懷妊し、平家の人々はみな歡喜した。大規模な呪術が次々に行われ、最後に仁和寺の覚法と天台座主の覚快が登場して、それぞれクジャクキャウ(孔雀經)の呪術とヘンジャウナンシの呪術

が行われた。

『平家物語』3「<sup>ゆるしふみ</sup>赦文」, 『古大』32, p. 210: [建禮門院の]御惱たゞにも渡らせ給はず、御懷妊とぞ聞こえし。主上は今年十八、中宮は廿二にならせ給ふ。しかれ共、いまだ皇子も姫宮も出きさせ給はず。もし皇子にてわたらせ給はばいかに目出からんとて、平家の人々はただ今皇子御誕生のある様に、いさみ悦びあはれけり。……仁和寺の御室守覺法親王、御参内あ〔ッ〕て、孔雀經の法をも〔ッ〕て御加持あり。天台座主覺快法親王、おなじうまいらせ給て、變成男子の法を修せらる。

- 54) ここでは“壽終リテ後男子トナラシメン”とする他のブツと違って、“速ニ其望ヲ成セシメ玉フ”とすることがヤクシの特技と考えられている。「アミターバ (amitābha/阿彌陀) が「ブッダの国」(buddha-kṣetra/佛國土) の女たちだけにかまけているのに対して、バーイシャジャグル (bhaiṣajyaguru/藥師) がこの世の女の心配をしている」という前提がある。

このような前提を当然とする背景には、日本文化圏に特有の命題がる。「男でありさえすれば、自動的にジャウブツ（成佛）が可能である」という命題である。「誰でもブツになる」という原則には例外条項が付随していて、「女はその限りにあらず」ということになる。

- 55) 超海通性, op. cit., 2, 19丁裏-20丁表.

- 56) 康僧鑑, 『無量壽經』上, 『大正』12, p. 268, c.21-24: 設我得佛 十方無量不可思議諸佛世界 其有女人聞我名字 歡喜信樂發菩提心厭惡女身 壽終之後復爲女像者 不取正覺《設ひ我佛を得て、十方無量不可思議の諸佛世界、其れ女人有りて我が名字を聞きて歡喜信樂し、菩提心を發して女身を厭惡せむ。壽終の後に復た女像と爲らば、正覺を取らじ。》

Luis O. Gómez, *The Land of Bliss*, Honolulu, 1996, p. 170: May I not gain possession of perfect awakening if, once I have attained buddhahood, any woman in the measureless, inconceivable world systems of all the buddhas in the ten regions of the universe, hears my name in this life and single-mindedly, with joy, with confidence and gladness resolves to attain awakening, and despises her female body, and still, after\* her present life comes to and end, she is again reborn as a woman.

\* “when” を “after” に訂正 (“壽終之後”)

- 57) 玄奘, 『藥師琉璃光如來本願功德經』. 『大正』14, p. 405, a.25-29: 第六大願 願我來世得菩提時 若諸有情 其身下劣諸根不具 醜陋頑愚盲聾瘡癰癰瘻背癢白癩癪狂

種種病苦 聞我名已 一切皆得端正點慧諸根完具 無諸疾苦《第六大願。願はくば、我來世に菩提を得む時に、若し諸の有情の其身下劣にして諸根不具、醜陋頑愚、盲聾瘡癰、攣臂背癢、白癩癲狂、種種の病苦あらむ。我が名を聞き已らば、一切皆端正點慧にして諸根完具し、諸の疾苦無きを得む。》

58) 『十二段草紙』、『大東急記念文庫善本叢刊』別巻、〔付録、〕森武之助、「翻刻解題篇」、pp. 3-98、東京、1977。

59) この部分の『猿轡』のテキストは、高野辰之が引用している（『新訂増補日本歌謡史』、東京、1978、p. 609）。

60) この「12人の軍司令官」は『バーイシャジャグル-スートラ』の末尾に近い所に登場して、「ブッダとブッダの教えと教団に帰依して、すべての人々の幸せのために努力しよう」と決心し、また「人々がバーイシャジャグルを信じてブッダになろうと励んでいれば、我々はそういう人々を守り、あらゆるトラブルを排除しよう」と決心する（*BhS*, pp. 30-31）。この軍司令官たちは自らブッダを目指すと同時に、ブッダを目指す人々に助力を惜しまないのである。この志操堅固な軍人たちは、ボーディサットヴァ時代のバーイシャジャグルと同じ姿勢をとっている。なお、『バーイシャジャグル-スートラ』に登場する「12人の軍司令官」については、長尾佳代子が注目すべき研究を発表している（「夜叉」、『仏教文学』22、1998、pp. 7-9、「神王と夜叉大将」）。

「12人の軍司令官」はそれぞれが7000人のヤクシャ（yakṣa/夜叉）を家来として連れてくる。総勢で84000人の大軍はがもっぱら関心を寄せるのは、自分がブッダになることと人をブッダにならせることであり、武力の行使に生き甲斐を覚えているわけではない。

61) 日本のジフニ-シンシャウ（十二神將）は、ブッダになるつもりは全くないし、ブッダを目指す人々を助けるつもりもない。ただ戦闘能力だけを買われて、主人ヤクシに命ぜられるままに、内乱の際に勝ちそうな側に加勢するのである。『平家物語』によると、木曾義仲に協力を求められた比叡山は、源氏の方が勝ち残ると判断して、軍事援助をすることに決める。その際に比叡山側が義仲に宛てて出した手紙の中で、ヤクシのジフニ-シンシャウは、源氏の軍に加わって平家と戦うために出動する3000人の比叡山兵に比せられている。

『平家物語』7、『古大』33、p. 89: 冥には十二神將、忝く医王善逝の使者として凶賊追討の勇士にあひくはゝり、顕には三千の衆徒しばらく修学贊仰の勤節を止て、悪侶治罰の官軍をたうけしめむ。

62) 天台座主の明運は不始末の責任を取らされて伊豆に流されることになったが、す

べては西光とその息子の差し金と思込む。比叡山の人々も西光親子を深く恨み、その名前を書いた紙をコンピラ（金毘羅）の足の下に置いて、呪い殺そうとした。

『平家物語』2, 『古大』33, p. 143: 山門には、せんずる所、我らが敵は西光父子に過ぎたる者なしとて、彼ら親子が名字をかいて、根本中堂におはします十二神将の内、金毘羅大将の左の御足の下にふませ奉り、「十二神将・七千夜叉、時刻をめぐらさず西光父子の命をめしとり給へや」と、おめきさけんで呪詛しけるこそ聞くもおそろしけれ。

ここで西光親子殺しを頼まれたコンピラとは、12人の「軍司令官」の中で最初に名前が挙げられるクンビラ（kumbhira）のことである。“kumbhira”はもともと「鰐」を指す普通名詞であり、“kumbhira-bhaya”（鰐の恐怖）という表現が古い仏教経典に見られるが、後代の文献ではヤクシャ（yakṣa/夜叉）の王の名前として使われることがある。

*Suvarṇabhāṣottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leipzig, 1937, p. 161:

kumbhīrāṭavakaś caiva piṅgalakapilas tathā ||

ekaikas caiva yakṣendraḥ pañcayakṣaśatair api |

teṣāṃ rakṣāṃ kariṣyanti yebhiḥ sūtram idaṃ śrutam ||

クンビラとアタヴァカは、そして同じようにピナガとカピラは、それぞれヤクシャの王であり、五百のヤクシャと共に、この経典を聞いた人々を守るであろう。

12人のシンシャウ（神将）のうちでコンピラだけは日本人に名前が知られたようで、神社名の“コンピラ-グウ”（金毘羅宮）として残り、その門前町の名前“コト-ヒラ”（琴平）も、前分“コト”は“金”の当て字“琴”の訓読[コト]であり、後分の“ヒラ”は“毘羅”に“平”の訓読[ヒラ]を当てたものである。“金”[キン]→“琴”[キン]（同じ音を別字で表記）→“琴”[こと]（同じ字を訓読音で発音）；“毘羅”[ヒラ]→“平”[ひら]（同じ音を訓読別字で表記）

63) 『日本靈異記』中 39, 小泉道（校訂）、東京、1984, p. 197.

64) 彫像に礼拝するだけで「前世を思い出す能力」（宿命通）が備わることや、ブッダの名前を口にするだけで地獄から逃れることができることは、仏教の前提である「行いと報いの対応法則」からの逸脱と言えよう。そして、4種の中国語訳の違いに反映されているのは、この逸脱が進んで「大衆化」に向かうテキストの変化である（長尾佳代子、「ギルギット本『葉師経』の成立—仏教大衆化の一齣—」、『パース学仏教文化学』7, pp. 101-110）。

しかしながら、マハーヤーナが仏教である限り、「輪廻」の苦しみからの解放を

究極の目標とするという点では、いささかの変わりもないのである。人々に「前世を思い出す能力」（宿命通）を備えさせたり、地獄から逃れさせたりするのは、ただただ究極目的に向かって努力させるためであり、呪術を使ってその場限りの問題解決を図っているのではない。

マハーヤーナの目標は人々を「輪廻」から解放してブッダにすることであり、一人一人の身に降りかかる非運を除去してやって有意義な人生を送らせることではない。まして、社会を良くすることなど眼中にない。個人や社会の問題をいくら解決したところで、人間が人間である限り究極の解放はないというのが仏教の基本的立場である。そして、「大衆化」された『パーイシャジャグル-スートラ』でも、この基本的立場はしっかり守られているのである。

ところが、日本では状況が全く異なる。パーイシャジャグルと違って、ヤクシが病気や災害のことを気にするのは、人々に最終的解放を目指させるためではなく、ブッダになる準備をさせるためはない。仏教の目標に何の関心もない日本人にとって、『ヤクシキャウ』はゲンゼ-リヤク（現世利益）の経典であり、ヤクシこそ究極のゴリヤク-サン（御利益様）である。

65) パーイシャジャグル (bhaiṣajyaguru/薬師) の彫像は、インドに全く残っていない。そして、彫像を扱う文献にも、このブッダのあるべき姿は記述されていない。実物の彫像も製作マニュアルも中国に伝わっていないのである。この文献を中国語に訳したくらいであるから、玄奘（602-664）と義浄（635-713）はパーイシャジャグル信仰に強い関心を抱いていたはずであるが、それぞれの執筆したインド旅行記の中で、全く何も報告もしていない。

そして、このブッダへの帰依を説く文献『パーイシャジャグル・スートラ』(bhaiṣajyagurusūtra/薬師經) は、写されることがあまりなかったからか、やっと今世紀になって1931年にカシミールの辺地で羊飼いの子供が偶然に見つけるまで、写本が全く知られていなかった。そして、この文献を引用する文献は一つしかない。

# Yakushi as Described in an Eighteenth-century Japanese Collection of Narratives

Nobuhiko KOBAYASHI

In 1730 Chōkai-Tsūshō (超海通性), a Shingon monk of Izumi (和泉), published a collection of Yakushi (薬師) narratives called “Zuiōjinroshū” (瑞應塵露集). Through the various types of Yakushi described, the evolution of Yakushi in Japan can be traced. Yakushi, who started as a supernatural specialist of medicine, gradually expanded the scope of his activities and ultimately became an all-round super-savior.